

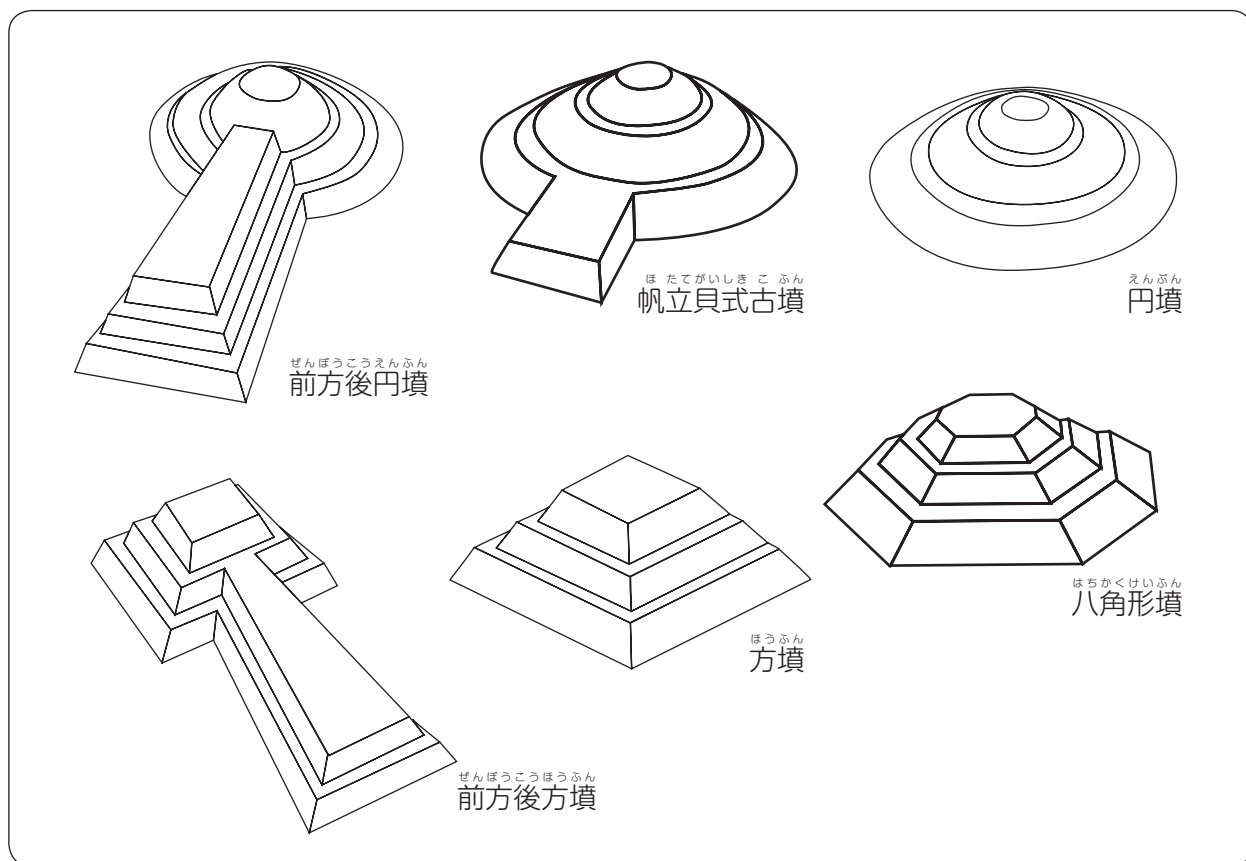
5. 古墳時代

1. どうして大きな古墳がつくられたの？

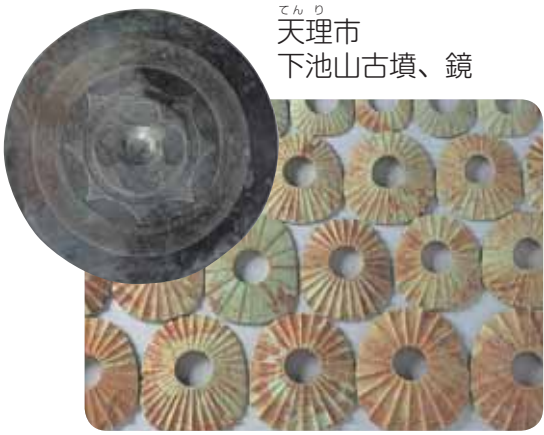
弥生時代にも墳丘をもつ墓はつくられました。弥生時代の墓と古墳をどう区別するかについては意見がわかれています。3世紀の終わりごろに奈良県を中心として大型の古墳がつくられるようになりました。これから300年あまりを古墳時代といいます。

世界の歴史のなかで大きな墓といえば、すぐ思いつくのがエジプトのピラミッドです。ピラミッドをつくるためには、作業を行う多くの人をピラミッドの近くに住まわせ、彼らの食料や生活用品の準備もしなければなりません。つまり、大きな墓をつくるには、強大な政治権力と富が必要です。日本の大型古墳も同じことで、強大な政治権力と富をもつ王や有力者が出現したということです。

日本の古墳にはいろいろな形があり、内部の構造も竪穴式石室や横穴式石室など多くの種類が見られます。また、古墳の上やまわりに埴輪が並べられました。4世紀ごろの古墳には円筒形の埴輪がよく見られます。5世紀ごろになると、人物、動物、武器などの埴輪も多くつくられました。また、古墳には鏡や装身具、馬具や武器・武具などが副葬されました。このようなことから、古墳からは当時の高度な土木技術を知ることができ、埴輪や副葬品からは当時の人々の生活のようすがわかります。



古墳と副葬品のうつりかわり

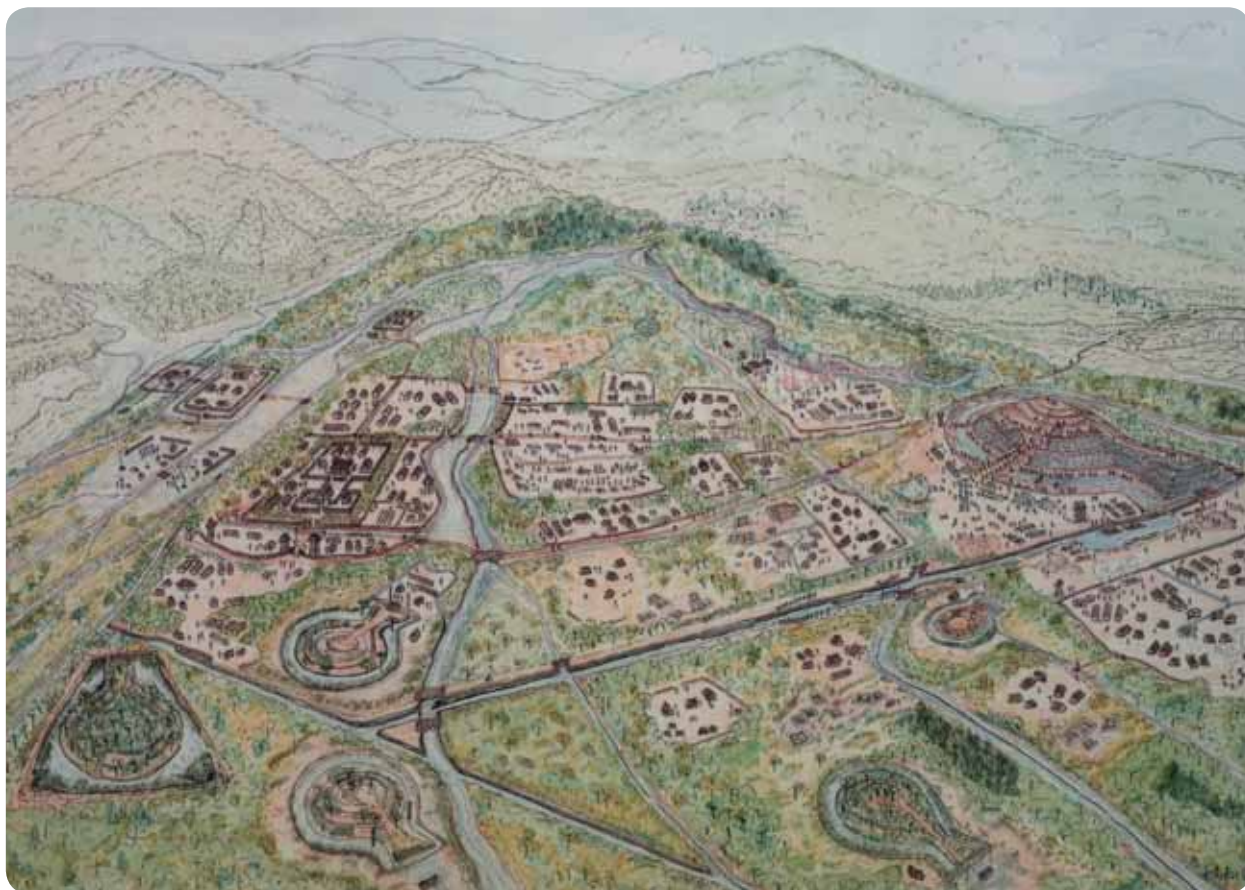
時期	古墳の形のうつりかわり	副葬品のうつりかわり
前期	 丘陵部や山のふもとにつくられ、円墳、方墳、前方後円墳が多くつくられた。	 天理市 下池山古墳、鏡 川西町 島の山古墳 車輪石
中期	 巨大な前方後円墳が多くつくられた。	 宇陀市 後出3号墳、鏡 橿原市 新沢千塚古墳群 武器と武具
後期	 各地に群集墳がつくられる。	 大淀町 越部古墳 環頭大刀の柄頭 葛城市 芝塚2号墳 剣菱形杏葉

2. 纏向遺跡はどんな遺跡なの？

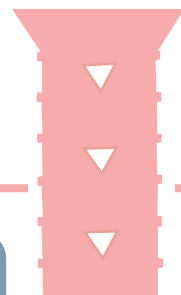
纏向遺跡は、三輪山の北西方向にひろがる巻向川の扇状地上につくられた古墳時代初頭の遺跡です。その範囲は約 2km 四方にもおよぶ大規模なものです。集落内部には大和ではじめてつくられた大きな墳墓である纏向石塚古墳やホケノ山古墳をはじめ、箸墓古墳などの初期の前方後円墳が集中しています。

纏向遺跡では、唐古・鍵遺跡のような集落を囲む環濠はつくられていませんが、用水路もしくは運河として使用されたと考えられる幅 5 m、深さ 1.2 m もある大きな溝がつくられていました。この溝の両岸には護岸のための板が打ち込まれており、大規模な土木工事が行われていたことが想像できます。また、祭殿と考えられるような建物群や、祭りに使ったと考えられる道具をすてた穴なども検出されています。

出土した土器には、中国地方や中部地方などの他の地域から運ばれてきたものがたくさんあります。このことから、纏向遺跡が普通の集落とは異なる性格を持つものと考えられます。この纏向遺跡を邪馬台国と考える説もあります。



纏向遺跡の想像復原図



纏向遺跡に運ばれてきた土器



板で護岸された大きな溝

3. 奈良県で古墳はどのように出現したの？

弥生時代、北部九州では、「かめ棺墓」「支石墓」などの墓がつくられていました。これらの特徴は、どのかめ棺も支石墓も構造あるいは大きさは同じようなものなのですが、副葬品に量的、質的な差が見られることでした。古墳が出現する前の時代に奈良県では方形周溝墓がつくられていましたが、これは構造あるいは大きさも、副葬品の量、質ともに同じようなものでした。つまり、当時の奈良では特定の人物のための墓はつくられなかったと考えられるのです。それが3世紀の終わりころ、奈良盆地の東南部に、まさに突然、大型の前方後円墳が出現するようになります。



柏木遺跡の方形周溝墓群



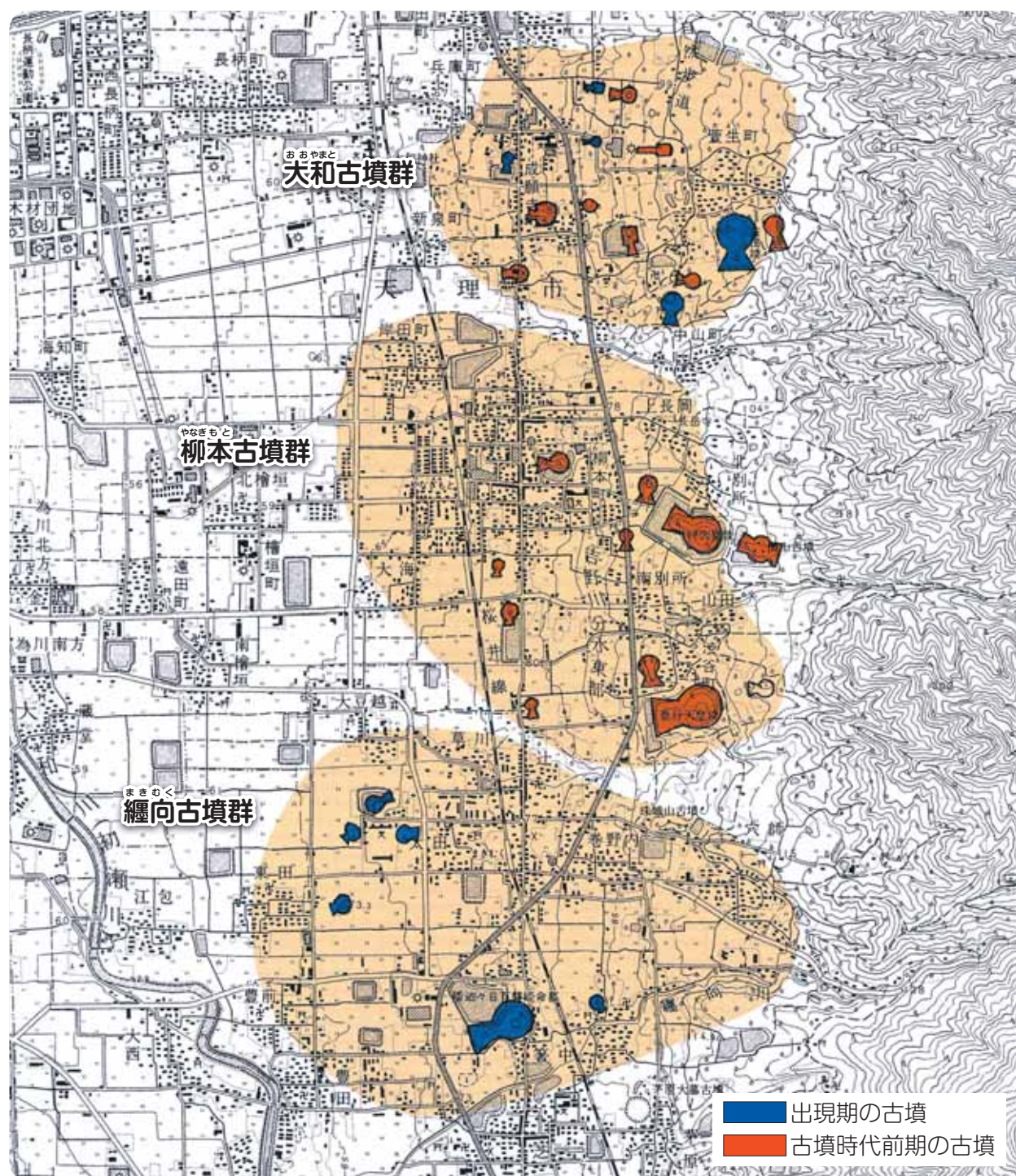
ホケノ山古墳



ホケノ山古墳の埋葬施設の復元模型

おうぼ 王墓出現

弥生時代の終わりごろ、奈良盆地東南部に位置する^{まきむくいせき}纏向遺跡のなかにいきなり全長が100 m以上ある前方後円墳が出現します。そして、引き続いてこの地域に集中して前方後円墳は築かれていきました。このことから、纏向遺跡はヤマト王権の中心地の^{こうぼ}候補となっています。



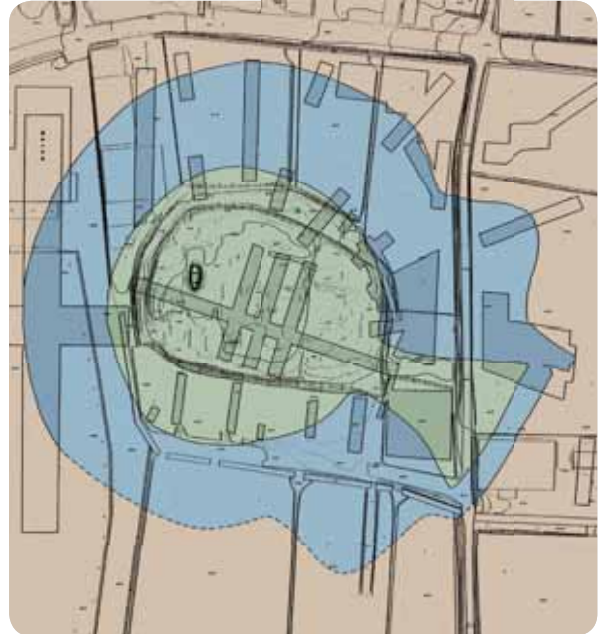
奈良盆地東南部の前期古墳の分布図

4. 初期のヤマト王権ではどのような古墳^{こふん}がつくられたの？

まきむくいしづか 纏向石塚古墳

桜井市^{さくら い}の纏向遺跡^{まきむくいしづか}の中にある古墳の一つで、最古^{ぜんぼうこうえんふん}の前方後円墳の一つと考えられています。全長約 93 m で、後円部に対して小さな前方部がつくという特徴^{とくちよう}があります。

古墳^{ほり}の濠^{ほり}の調査で、古墳時代のはじめの土器とともに複雑な文様をきざんだ円板^{こもんえん}（弧文円板^{ばん}）やにわとり形^{すき くわ}の木製品、柱に使った多くの木材、鋤^{ほくつ}や鍬などの木製農具^{ほくつ}が発掘されています。柱材が出土していることから、この古墳にかかわる建物があったのか、あるいは古墳の周りに柱を立てて祭りが行われていたのか、いろいろなことが想像できます。



纏向石塚古墳



弧文円板の復元品



にわとり形の木製品

はしか 箸墓古墳

桜井市にある三輪山のふもとにつくられた箸墓古墳は最古の大型前方後円墳といわれています。大きさは、全長 276 m、高さ 25 m で、右の図を見るとわかるように、前方部が 4 段、後円部が 5 段の構造になっています。また、前方部が先端にいくにしたがって高くなっているのが特徴です。この古墳が築かれた時期については、墳丘上から採集されたり、周辺の発掘調査で出土した土器などから 3 世紀後半と考えられており、ヤマト王権の最初の王墓とする説があります。また、箸墓古墳の北にひろがる纏向遺跡が邪馬台国の候補地のひとつであることから、邪馬台国の女王、卑弥呼の墓とする説もあります。



箸墓古墳



発掘された箸墓古墳のふき石

さくら い ちやうすやま
桜井茶臼山古墳

桜井市南部に位置し、北への
びる自然の丘陵^{きゆうりやう}を利用してつく
られた古墳です。全長 207 m
あります。右の写真を見ると、
この古墳は丘陵の先端部^{せんたん}を切断^{せつだん}
してつくられていることがよく
わかります。そのために前方部
があまり開かない形をしている
のが特徴です。後円部から出土
した壺^{つぼ}は、底に孔^{あな}をもつことが
大きな特徴の一つです。この孔^{とくちよう}
は土器の製作の段階^{だんかい}からあけら
れており、はじめから古墳で使
用することを目的に製作されて
います。したがって、この壺は
土器ではなく、埴輪^{はにわ}なのかもし
れません。



桜井茶臼山古墳



底に穴の開いた二重口縁壺^{にじゅうこうえんつぼ}



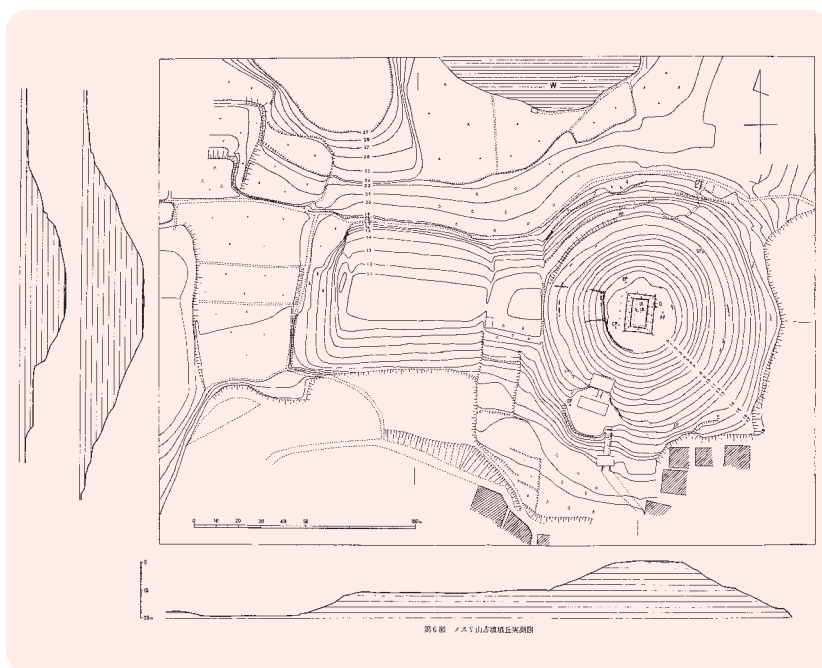
竪穴式石室内部^{たてあな}

メスリ山古墳

奈良盆地の東南部、桜井市にある全長 230 m の大型前方後円墳です。後円部中央にある竪穴式石室のまわりには長方形に大型円筒埴輪や円筒埴輪などを二重にめぐらせていました。大型の円筒埴輪は高さ 242cm、直径 90cm もあり、日本最大のものです。石室は二つありましたが、一つは盗掘されていました。もう一つの石室には、鉄製弓矢や 200 本を超える鉄製槍先、236 本の銅鏃、50 本の石製鏃などが納められており、お墓というよりも、まるで武器の倉庫のようでした。



大型の円筒埴輪



メスリ山古墳



石室と埴輪の配列の復元図

6. 古墳にはどんなものが埋葬されたの？

古墳には死者を葬るだけでなく、副葬品と呼ばれる品物が納められました。副葬品には、装身具や鏡をはじめ、武器や武具、馬具などたくさんの種類がありました。土器をはじめ、石製品、金属製品など材質もさまざまなものがあります。

古墳時代の前期には鏡や石製の腕輪が多く副葬されました。また、威儀具と呼ばれる権威のシンボルとなるものも副葬されました。なかには、黒塚古墳のように鏡を 30 面以上納めたものや、島の山古墳のように石製の腕輪を 130 個以上納めたものも発見されています。

中期になると、鉄製の刀や鏃などの武器や、甲や冑などの武具、農具や工具を納める例がたくさん見られるようになります。後期には、武器だけでなく馬具も納められる例も見られるようになります。また、須恵器などの土器もたくさん納められるようになります。

これらの副葬品をよく見ると、その古墳に葬られた人が、男性であるか女性であるかがわかったり、どのような身分で、どのような仕事をしていたかが推定できることもあります。



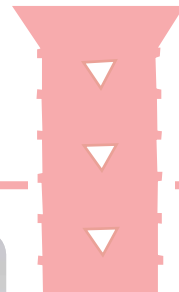
石製品の出土状況（川西町島の山古墳）



勾玉（橿原市新沢 500 号墳）



玉杖（桜井茶臼山古墳）



甲冑と刀 (榎原市新沢 115・281・109 号墳)



甲冑 (新沢 139 号墳)



甲冑 (葛城市兵家 12 号墳)



f 字形鏡板 (葛城市芝塚 2 号墳)



鞍金具・前輪 (天理市東大寺山 6 号墳)



心葉形杏葉 (桜井市珠城山 3 号墳)



飾り馬 (三宅町石見遺跡)



壺鏡 (天理市東大寺山 6 号墳)

7. どうして「埴輪」がつくられたの？

古墳は、王や支配者を葬るためのお墓ですが、また一方で、その埋葬の儀式が、次の王や支配者の権威を示す場ともなりました。したがって、古墳の上で行われる儀式には重要な意味があり、この儀式に関連する道具である「埴輪」も大きな役割をもっていたと考えられます。例えば、円筒埴輪には、古墳への悪霊の侵入を防いだり、聖域を区画する意味があったかもしれません。器財埴輪や人物埴輪は古墳と王や有力者の死後の世界を守ったのかもしれませんが。



古墳の儀礼

埴輪の種類

埴輪には土製のものと木製のものがあります。

円筒埴輪

円筒埴輪は丸い筒形をしています。帯状の突起がめぐり、三角形や四角形、丸形のすかし穴があいています。



円筒埴輪

家形埴輪

住居や倉庫をあらわしています。古墳時代の建物の構造がよくわかります。中には祭殿と考えられる立派なものもあります。



さまざまな家形埴輪

はにわ 人物埴輪

当時の人々の姿が服装や持ち物がくわしく表現
されていて、その人の身分や役割がわかります。



いれすみのある人



弓をもつ人



いすに座る人



巫女

はにわ 動物埴輪

馬や鹿、いのしし、犬、鳥な
どさまざまな動物が表現され
ています。



鳥



飾り馬とその他の動物埴輪

はにわ 器財埴輪

かぶとや盾などの戦いに使う武器、武具やきぬがさ、
さしばなど儀式的道具をあらわしています。



かぶとと盾



きぬがさ



さしば（右）など儀式的道具



ゆぎ（矢を入れる道具）

13. 藤ノ木古墳に葬られたのはだれ？

奈良県斑鳩町の藤ノ木古墳は直径 48 m、高さ 9 m の円墳で、6 世紀後半に築かれたと考えられています。全長 14 m の横穴式石室の奥には赤くぬられた家形石棺が置かれていました。古墳の多くは盗掘の被害をうけていますが、藤ノ木古墳は奇跡的に盗掘をうけていませんでした。

石棺の奥には豪華な馬具や武具、武器などが置かれていました。石棺内には、2 体の男性の人骨とともに鏡、大刀、剣、冠、履、装身具などが納められていました。これらの遺物のなかで注目されたのは、象・獅子・兎・舌を出した鬼・龍・鳳凰などの珍しい文様を透かし彫りにした金銅製の馬具で、当時の東アジアの金属工芸品のなかでも一級品と言われ、当時の海外との交流もうかがえます。石棺内の 2 人の男性のうち、一人は 17 ～ 25 歳くらいの男性で身長は 170cm と推定され、もう一人は残された骨の数は少ないものの男性と考えられています。第一級の副葬品から考えて、天皇の一族かこの地の有力な豪族などが考えられていますが、確定はしていません。



横穴式石室と家形石棺



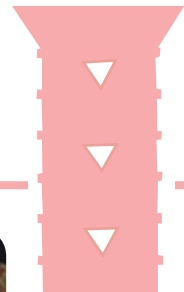
石室内の遺物の出土状況



石室内の被葬者想定図



金銅製冠（復元品）



金銅製鞍金具 後輪



金銅製鞍金具の象の文様



金銅製馬具の鳳凰の文様



金銅製鞍金具 前輪



金銅製馬具の龍の文様



金銅製履 (復元品)